

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2011年09月22日

派遣者氏名（専門分野）	土谷真理子（ドイツ文学）
-------------	--------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	「18世紀ドイツ文学におけるスイス・イメージの形成と変容 ーゲーテのスイス体験とその言語表現の相関ー」
-------	--

派遣期間

2011年06月14日～2011年08月15日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問研究機関	ドイツ	ヴァイマル	ヴァイマル古典財団 (Stiftung Weimarer Klassik)	Dr. Jonas Maatsch
	ドイツ	ヴァイマル	アナ・アマーリア太后妃図 書館 Herzogin Anna- Amalia Bibliothek	同上
	ドイツ	ヴァイマル	ゲーテ・シラー文書館 Goethe-Schiller Archiv	Professor Dr. Bernhard Fischer

派遣先で実施した研究内容

18世紀（おもに1750年代以降）のヨーロッパ、とりわけドイツ語圏におけるスイス旅行ブームの成立状況（スイス旅行やアルプス登山が流行するにいたった経緯や、当時の旅行者に好まれたルートなど）を把握するための文献を収集および閲覧することが今回の目的であった。そこで、ヴァイマル「アナ・アマーリア太后妃図書館 Herzogin Anna-Amalia Bibliothek」の研究センター、および「ゲーテ・シラー文書館 Goethe-Schiller Archiv」の2施設を利用した。図書館はドイツ古典主義作家であるゲーテやシラーの研究書を中心に当時の文献やドイツ文学、文化学、歴史学全般についての研究論文が系統的に集められており、博士学位論文も古いものから最新のものまでを架蔵、またアーカイブでは18世紀当時の手稿や資料が閲覧できる。19世紀以前の資料および貴重本に指定されている文書類は図書館内の特定の部屋でのみ閲覧可能であったため、おもにそこにおいて文献の講読と研究を進めた。

スイス旅行に関する最近の研究状況を俯瞰すると、エドゥアルト・ツィーエンの『1750年から1815年におけるドイツのスイス熱 Die deutsche Schweizbegeisterung in den Jahren 1750-1815』（1922年）と、リヒャルト・ヴァイスの『ドイツ文学におけるアルプス体験 Das Alpenerlebnis in der deutschen Literatur』（1933年）が重要で、とくに後者は出版から約80年たった今でもなおこの分野における基本文献であるということが分かった。そこで、この本の内容を検討して研究史を整理し、かつ文献を系統的に収集することが現地での主たる活動となった。ヴァイスのこの著作は、20世紀前半を代表するスイスのドイツ文学研究者エミール・シュタイガーとその学派に属する仕事で、18世紀当時のドイツ語の文学作品をマテリアルにして、決定的な価値観の転換を把握しようと試みている。著者は前書きの中で、ヨーロッパ人のアルプス体験を、精神史の観点から見ると必然的かつ不可避の人間と山岳風景との最初で最後の対決として位置づけている。その論証材料として文学を使うのである。

ドイツ語の「スイス熱 Schweizbegeisterung、または Philhelvetismus」という言葉は、フランス語

philhelvétisme、英語の philhelvetism、またイタリア語の filelvetismo に相当し、18 世紀後半に起こったヨーロッパ規模の精神的運動である。18 世紀中葉に至るまでは「文明化されておらず、まるで熊のような住民の住む岩山と溪谷ばかりの不毛の土地」とされてきたスイス、そして従来 of 神学的には大地の「醜い腫れ物」や「神の怒りの噴出物」と捉えられ、化け物たちの住む異界だと恐れられていたアルプスが、ついにはヨーロッパ最大の旅行目的地となった契機は何であるか—この自然認識の変遷が、文献調査を通してスイス・アルプス・イメージを追う上での中心主題となった。このような観点から今回ワイマールで体系的に収集および閲覧した資料を、別添の文献表に示す。上述のように、スイス熱自体は汎ヨーロッパ的な現象であり、ドイツ語圏を超えた検討が必要であることも痛感させられた。

文献調査以外にも、ヴァイマル古典財団に属する各博物館の司書やゲーテハウス、シラーハウスの管理者および古典主義に詳しい財団研究員に館内の案内をしてもらい、展示品についての詳しい説明をはじめ、18 世紀に集められた世界中の鉱物標本とその採取地の地誌など、一般には公開されていない所蔵品をふくめ、当時の旅に関する文化的資料や関連文献、絵画などを好意によって閲覧させて頂いた。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

そもそも「スイス熱」とは、アルプスの風景に慣れ親しんでいる地元民ではなく、スイスの圧倒的な山岳風景から新鮮な印象を受けた外部からの旅行者達の精神的な運動であるということを確認した。また従来の研究において、スイスに自然に最初に目を向けたとされているアルブレヒト・フォン・ハラーの詩『アルプス Die Alpen』(1732 年)は、ルソー的な意味での自然賛美ではなく、むしろ荒涼とした山岳を含むすべてのものが神意にかなって合目的に作られているという「弁神論 Theodicee」を主張している点から、理性主義の限界を問題視する啓蒙主義内部からの現象だと判明した。またハラーの自然理解には「失われた楽園への憧憬」という「憧れ Sehnsucht」の要素は含まれているものの、自分以外の他者の不在状態、すなわち「孤独 Einsamkeit」という要素が欠けている。ハラーにとっては人間の手が加えられていない自然の探求は実は、祖先から受け継いだ生活様式に従って生きている質実な住民に代表される根源的な人間性の探求であり、いまだ人間の文明社会と相対する根源的な自然の賛美ではないのである。つまりハラーの立場は、いまだに道徳的な美德や秩序に重きを置く啓蒙主義の色彩を色濃く帯びており、新しいアルプス体験それ自体とは言えないのである。新たな自然認識への明確な価値観の転換を担ったのはむしろ、小説『新エロイズ』(1761 年)を書いたジャン・ジャック・ルソーである。彼は最初からスイスのアルプスの風景を「センチメンタル」に眺めた—すなわち、不自然なしきたりの横行する文明社会の閉塞状況のなかで生きてゆくうちに失われてしまった大切なものである“人間の自然”の代替として見ていた。デフォーの『ロビンソン』をはじめとする「ロビンソナーデ」の長い系譜が示しているように、その他の同時代人たちにとっては四方を海に囲まれた到達しがたい遠方の島がユートピアであったが、ルソーはスイスのアルプスを「普遍的な逃避の目的地、ヨーロッパの中心にある崇高な避難所 das ersehnte Ziel einer allgemeinen Flucht, das erhabene Refugium」として見出したのだ。このような価値観の生まれる土台は、すでに英国庭園の「無秩序の美学」によって形成されていた。感傷主義的個人は自我の投影空間を求め、自分を取りまく自然の中にそれを発見した。彼らは自然の中であって初めて、自分自身を享受することができたのだ。このように、自然との対話の契機は、当初は消極的な原因、すなわち社会の閉塞感から逃れるための他者の不在(=孤独)の追求が生んだのである。そのため、人里はなれた山岳、森、島がその典型的な対象となった。

『庭園論 Theorie der Gartenkunst』(1779)で有名なヒルシュフェルトによると、「ロマンティックな風景」とは、多様で変化やコントラストに富んだ風景そのものと、その風景が観察者に呼び起こす感情の両方を含む。ロマンティック、すなわち英国庭園様式においては理性的な秩序の美学と無秩序の美学とが対置され、直線の代わりに曲線がもてはやされ、それまでは無形式で恐怖を引き起こすものとされてきた自然の風景は、今やコントラストに富んだ歓迎すべきものとなった。啓蒙主義者が恐怖の感情を明瞭な思考のもつれとして忌避した一方で、ルソーをはじめとする感傷主義者にとっては、恐怖が生み出す思考の中断は心地よいものであった。というのも、魂の高揚、すなわちセンセーションを生み出すからである。人々はいまや、ことさら恐怖を感じるために、荒々しい山岳風景を求めた。ここからアルプスは「ナルキッソスの鏡」という新たな意味を持つことになる。すなわち、「自然への逃避」においては自然それ自体が重要なのではなく、コントラストに富んだ自然と向き合った時に人間に起こる感情の起伏がもつぱらの関心ごとなのである。こうして、

ルソーの小説『新エロイズ』の舞台を巡礼する人びとが列をなし、スイス熱の火付け役となった。

スイス旅行記の年代別の出版頻度だけを取ってみてもスイス熱の影響は明らかで、ルソー以前すなわち1770年頃までは、スイスは観光の対象となる国ではなく、ドイツ語のスイス旅行記の出版数はごくわずかだった。イギリスではすでに17世紀後半からスイスが観光旅行先になっていたようだが、刊行されたスイス旅行記のテーマはその政治組織、政治状況や文化に集中していた。啓蒙主義時代以前のドイツでは、唯一悟性に対応し、そのため“自然な *natürlich*” 大地の形は滑らかな球の表面であると考えられていたし、思考の明澄さと同様に地形学的にも見晴らしの良さが求められた。そのため、山岳は18世紀中庸までは一般的に平坦な楽園に現れた“病的な腫れ物、瘤” ととらえられ忌避された。また、アルプスの険しい山岳地形はそもそも交通の支障であったため、物理的な理由からもスイスは迂回されることがほとんどだったのだ。

ドイツ語によるスイス旅行記の変化は、ヨハン・ゲオルク・カイスラーまで遡る。当時の流行の旅行目的地はパリであったが、カイスラーはローマをはじめとするイタリアへの旅行を推奨し、イタリアへのグランドツアー・ブームに一役買った。彼に言わせると、イタリア最大の見どころは、自然ではなく古代文明の遺跡群である。カイスラーは1740年の書簡集の形で出版された著作の中で、不毛な断崖や荒々しい山々の未開の国というスイス・イメージを覆そうと試み、その町並みの美しさを讃えた。だがカイスラーの関心は建築や道路事情など、人工物にばかり寄せられており、スイスの自然に関する記述はほぼ皆無で、わずかに「*Montagnes maudites* が左側に見える」と記しているにとどまる。

これに対してイギリス人ジョセフ・アディソンは、1701年から1703年にかけてのイタリア旅行の折にスイスを経由し、その風景の印象を書きとめている。アディソンは他のイギリス人旅行者とは異なり、急に現れる崖や不規則で不恰好な岩肌に「一種心地よい戦慄」を感じており、「ロマンティックな」、すなわちコントラストに富んだ風景によって沸き起こる感情の起伏を楽しんでいる点で、次代を先取りしているといえる。

おもにルソーの読者によってしだいに慣習化されたスイス旅行は、より強いコントラストを風景に求めるアルプス旅行へと発展していった。ルソーは「春夏秋冬すべての風景を体験できるのがアルプス」だと述べ、山々はもはや障害ではなく、旅行の目的となった。ジェイムズ・マクファーソンの『オシアン *Ossian*』も一役買っており、読者はオシアンのような暗いメランコリーの感情と英雄的体験をスコットランドの（北部）高地、もしくはそれ以上に荒涼としたアルプスの山岳地帯の風景に重ね合わせた。

また、この頃に勃興した崇高と感嘆の美学的コンセプトは新たな感受性を生み出した。マイナースやボウターヴェックのような哲学者や美学者が精力的にはたらきかけた結果、スイス旅行の目的と方法は大きく変化した。1770年代にはドイツ語の旅行ガイドやハンドブックが出版され、スイスについての情報がようやく浸透し始める。マイナースはスイス・ハンドブックのなかで「いまやスイスがヨーロッパ最大の旅行地になった」と断言しており、人間社会のしがらみから逃れて体と心の両方を休めることがその主な目的だとされている。ここには、ルソー主義者としてのマイナースの姿が垣間見られるが、ヴァイスによれば、彼は啓蒙主義との折衷を目指していたという。マイナースの影響でベルン高原地方のシュタウプバッハの滝はかならず月明かりの下で眺められるようになったし、グリンデルバルトの氷河やユングフラウヨッホも見落とせない名所となった。

1780年から90年代には、『スイス便り *Briefe aus der Schweiz*』というタイトルの本が毎年少なくとも一冊は出版され、旅中の感情の昂ぶりを描き出すことが中心主題となった。アルプスは即物的な記述の対象というよりもむしろイメージであり、満たされることのない憧憬の場であったことが分かる。そのため、自然科学者たちが対象を観察してその目録作成にいそしむのとは異なって、旅行者の内部に及ぼす効果が列挙されることになる。例えばヨハン・ゴットフリート・エーベルは1793年に出した旅行ガイドの中で以下のように書いている。「すべての偉大なもの、尋常でないもの、感嘆に値するもの、恐ろしいもの、戦慄するもの、美しいもの、心地よいもの、刺激的なもの、快活なもの、穏やかなもの、甘美に元気付けてくれるものの、これら自然の中に撒き散らされたものたちがここでは小さな空間の中に集結しているようで、まるでこの国はヨーロッパの庭のようだ。(…) 活火山の光景や海の眺望を除いては、スイスで旅人が見つけられない自然の光景、自然の美しさを私は知らない」。エーベルはまた徒歩でのスイス旅行をすすめており、その理由として「低価格」、「空気療法 *Luftbäder* を提唱したルソーのコンセプトにかなっていること」となっており、上半身を適度に動かす運動が非常に健康的であるとも言っている。またこの頃には、乳清療法 *Molkenkur* も流行し、おもに女性の旅行者の増加に繋がった。このように、当時の健康志向（ブーム）もスイス熱に関与し

ていると考えられる。

これ以後、アルプス体験によって発展した新しい感性は、ドイツ国内の風景にも適用されるようになる。たとえばフリードリヒ・ボウターヴェックはすでに 1796 年に、ドイツの「ヴェラ溪谷 Werratal やブロッケン山 Brocken はスイスの風景に劣らない」と主張している。それとともに、20 年ほど流行したルソー式の自然認識からいわばカント式の自然認識へと変化し始めるとヴァイスは指摘する。すなわち、「感情の高揚を生み出す人間社会からの避難所 Fluchtsort」から自然をひとつの観念としてみる「観察の対象」へと興味に移るのだ。いまやスイス・イメージは自然の国から自由の国へと移行し、スイス旅行記もカント哲学とフランス革命の影響によって変化し、歴史や自由について記述されるようになってくる。

ヴィルヘルム・テルの題材はゲーテによって約 30 年にわたって資料が収集されたものの、結局作品化されなかった。ゲーテはそれをそのままシラーに譲るが、ヴァイスはシラーが当時のアルプス熱を政治的自由のモチーフと結合させたを指摘している。シラーは実際には一度もスイスへ行くことのないまま『ヴィルヘルム・テル』を書き上げた。その際に利用したのが、まさに当時の流行であったロマンティックな風景の典型としてのスイスの風景であった。シラーはテルの中で湖、山、滝、氷河、溪谷などの類型的風景の構成要素を網羅し、日の出や月夜といった自然現象も取り入れている。このように、スイスの雄大な自然と政治的自由を題材としたシラーの『ヴィルヘルム・テル』こそが、スイス・イメージを決定し、またスイス熱・アルプス体験を締めくくったと言うべき作品だとわかる。ここにきて「スイス熱」は終息に向かうことになる。

以上のように、18 世紀ドイツ語圏におけるスイス旅行の実態とドイツ語で書かれた旅行記における言語表現の相関を整理し、その特徴を明らかにする研究作業をすすめてきた。今後は、イギリスで起こりヨーロッパ全体において流行するにいたっていたグランド・ツアー（おもな行先はイタリア）とスイス旅行の時系列的に関係づける作業、ひいてはゲーテのスイス旅行の目的や意義をこの流れの中に位置づける作業へと進んでいきたい。

派遣後の研究発表の予定

国内の 18 世紀ドイツ文学専門家の研究会「オイフォーリオン」の 9 月度の定例会（9 月 18 日、於：大阪教育大学天王寺キャンパス）において、ヴァイマルでの文献調査報告として、おもに上記エドゥアルト・ツィーエンとリヒャルト・ヴァイスの文献紹介をおこなった。また 11 月 26 日には「大阪大学ドイツ文学会」の研究発表会において、ヴァイマルで収集した 18 世紀のスイス旅行やスイス熱、アルプス体験に関する文献の総括および今後の研究の展望を発表する予定である。また並行して、投稿論文の形にもまとめあげ、国内の学会機関誌に投稿する予定である。またゲーテ自身の言語を介した表現（旅行記および詩）を探るべく、よりミクロなテキスト分析にも立ち返りながら、いままでの論を発展・展開させて、2012 年 12 月を最終的な博士論文提出の目標としたい。

- Bätzing, Werner: *Die Alpen. Entstehung und Gefährdung einer europäischen Kulturlandschaft*. München 1991.
- Bausinger, Hermann (Hrsg.): *Reisekultur. Von der Pilgerfahrt zum modernen Tourismus*. München 1953.
- Bode, Wilhelm: *Die Schweiz wie Goethe sah*. Leipzig 1922.
- Bode, Wilhelm: *Goethes Schweizer Reisen*. Leipzig 1922
- Bode, Wilhelm [neu herausgegeben von Otto, Regine und Wenzlaff, Paul-Gerhard] : *Goethe in vertraulichen Briefen seiner Zeitgenossen. 1. 1749-1793 / 2. 1794-1816 / 3. 1817-1832*. München 1982.
- Brenner, Peter J. (Hrsg.): *Der Reisebericht. Zur Entwicklung einer Gattung in der deutschen Literatur*. Frankfurt a. M. 1989.
- Brenner, Peter J.: *Der Reisebericht in der deutschen Literatur. Ein Forschungs- überblick als Vorstudie zu einer Gattungsgeschichte*. Tübingen 1990.
- Brenner, Peter J.: *Von der Begegnung zur Beharrung. Goethes Reisen in Deutschland*. In *Goethe-Jahrbuch 120*. Weimar 2003.
- Burk, Berthold: *Elemente idyllischen Lebens*. Frankfurt a. M. u. Bern 1981.
- Dewitz, Hans-Georg: *Goethes Tagebuch der ersten Schweizer Reise 1775*. Frankfurt a. M. 1980.
- Escher, Hans Conrad: *Auszüge aus den Nachrichten über die Alpen, in Briefe aus Helventien*. In: *Bibliothek der Schweizerischen Staatskunde, Erdbeschreibung und Literatur 2*. 1796.
- Fränkel, Jonas: *Goethes Erlebnis der Schweiz*. St. Gallen 1949.
- Hentschel, Uwe: *Mythos Schweiz. Zum deutschen literarischen Philhelvetismus zwischen 1700 und 1850*. Tübingen 2002.
- Hiebel, Friedrich: *Goethe und die Schweiz*. Dornach 1982.
- Lohse, Nikolaus: *Die Begehung der Grenze. Goethes Selbstinterpretation der Schweizreise von 1779*. In *Goethe-Jahrbuch 117*. Weimar 2000.
- Raimond, Petra: *Von der Landschaft im Kopf zur Landschaft aus Sprache. Die Romantisierung der Alpen in den Reisebeschreibungen und die Literarisierung des Gebirges in der Erzählprosa der Goethezeit*. Tübingen 1993.
- Schnyder-Seidel, Barbara: *Goethes letzte Schweizer Reise*. Frankfurt a. M. 1980.
- Schnyder-Seidel, Barbara: *Goethe in der Schweiz. anders zu lesen*. Bern u. Stuttgart 1989.
- Schnyder-Seidel, Barbara: *Goethes Schweizer Reisen 1779 und 1797*. Berlin 1995.
- Solar, Gustav: *Das Panorama und seine Vorentwicklung bis zu Hans Conrad Escher von der Linth*. Zürich 1979.
- Strich, Fritz: *Goethe und die Schweiz*. Zürich 1949.
- Weiss, Richard: *Das Alpenerlebnis in der deutschen Literatur des 18. Jahrhunderts*. Horgen-Zürich u. Leipzig 1933.
- Weiss, Richard: *Volkskunde der Schweiz. Grundriss*. Zürich 1984.
- Wyder, Margrit: *Landschaften und Begegnungen auf Goethes Schweizer Reisen: der Vierwaldstättersee*. In *Goethe-Jahrbuch 120*. Weimar 2003.
- Ziehen, Eduard: *Die deutsche Schweizbegeisterung in den Jahren 1750-1815*. Frankfurt a. M. 1922. *Festschrift „Funde und Forschungen“, die das Goethe- und Schiller-Archiv zu Ehren des 60. Geburtstages von Julius Wahle herausgab*. Leipzig 1921.